

絵本の読み聞かせにおけるグループサイズは

幼児の反応に影響を及ぼすか？

吉岡真梨子¹・古家 遥²・井上 弥

(2019年1月9日 受理)

Does the Group Size during a Picture Book-reading Affect the Pre-school Children's Response?

Mariko YOSHIOKA¹, Haruka FURUYA² and Wataru INOUE

Abstract: The purpose of this study was to investigate the influence of group size on the response during a picture book-reading by the pre-school children. Five or six-year old children of kindergarten (N=28) were assigned to the "3 people" group and "8 people" group. The checklist was created from the responses observed during the picture book-reading. The checklist consisted of 16 responses categorized into 5 types, i.e., "utterance", "facial expression", "action", "gaze", and "response to other people". Analysis of variance for each response, with group size ("3 people" group, "8 people" group) and time section (first half, latter half) as independent variables, were performed. The main results were as follows: (1) The response to "see the child who talked" was higher in the "8 people" group than the "3-person" group, in the latter half. (2) The "laugh out loud" response was higher in the "8 people" group than the "3 people" group, in both the first half and the latter half. Based on these results, the features of each group size were discussed.

Key words: book-reading, pre-school children, group size

キーワード：読み聞かせ，幼児，グループサイズ

問題と目的

読書教育の重要性

これまで読書教育の重要性は様々なところで述べられてきた。子どもの読書活動の推進に関する法律（文部科学省 平成13年施行）第二条基本理念では、「子どもの読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていくうえで欠くことのできないものである」とされている。しかし、近年「読書離れ」が問題とされており、全国学校図書館協議会・毎日新聞社によって実施された「第64回学校読書調査」

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

² 武雄市立武雄小学校

(2018)によれば、本を全く読まない児童生徒の割合は年齢が上がるにつれて高くなっている。「読書離れ」の原因としては、読書への関心が薄いことや読書習慣が身に付いていないことなどが考えられる。

幼稚園教育要領解説(文部科学省 平成20年施行)の言葉の領域においても「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」といった内容が設けられている。絵本や物語、紙芝居などの読み聞かせは、幼児にとって「様々なことを想像する楽しみと出会うこと」であり、登場人物になりきることなどによって、「未知の世界に出会うこと」「想像上の世界に思いを巡らせること」もできると述べられている。これを踏まえると、幼児期の段階から絵本や物語などに多くふれ、未知の世界に出会うなどの体験を繰り返すことが、読書への関心につながり、小学校以降の読書習慣の形成につながっていくと考えられる。

幼児期の読み聞かせの効果に及ぼす要因

幼児が絵本や物語を通して、想像する楽しみや未知の世界に出会ったり、想像上の世界に思いを巡らせたりすることができるかは、どのような環境でどのように読み聞かせを行うかに大きく影響されていると考えられる。松村・根岸・宇陀(2014)は、絵本の読み聞かせ後の問いかけに着目し、子どもの物語理解とイメージ形成に与える影響を調査した。感想を問いかける質問群と感想を問いかけない統制群の2グループに分けてテストを行った結果、読み聞かせ後に読み手が感想を問いかけることによって、幼児はより物語を理解することができるが、物語のその後などを想像することができなくなることが明らかになった。また、小林(1997)は、年齢や性別、読み聞かせの繰り返し、座席の位置が、絵本の読み聞かせに対する幼児の反応に及ぼす影響を調査した。この調査では、まず予備実験によって、幼児が絵本に対して興味を示した行動と興味を示さなかった行動について、チェックリストを作成している。その後、読み聞かせに対する幼児の反応の収集と同じ絵本で二度行っている。その結果、1回目の読み聞かせでは年齢が上がるにつれて絵本に集中できることや、2回目では年齢間に差が見られなくなることが明らかになった。座席の位置に関しては、5歳児は座席によって集中力に差はみられないが、3歳児と4歳児は後方に座ると読み聞かせに集中できなくなる可能性が示唆されている。これらの研究により、読み聞かせを行う際の環境や様々な条件が、幼児の読み聞かせに対する反応や絵本や物語に対する理解などに影響を及ぼすことがわかる。幼児期に絵本や物語にふれる主要な場としては、家庭や幼稚園、保育園での読み聞かせが想定されるが、上記の研究はすべて13名以上の集団を対象にしており、幼稚園や保育園で行われる読み聞かせの環境に当てはめることができるだろう。

他方で、家庭における読み聞かせ時の幼児の反応に着目して、絵本に対する子どもの好みの取得方法を検討した松村・杉・宇陀(2008)において、同時に読み聞かせを受けた幼児の反応に類似がみられた。このことから、同時に読み聞かせを受けた場合、互いの反応に影響されることが示唆された。彼らの研究において同時に読み聞かせを受けた幼児は姉妹であるため、互いの親密さが影響していたとも考えられるが、集団での読み聞かせにおいても同様に、読み聞かせを同時に受けた他の幼児に影響を受ける可能性があり、読み聞かせを受けるグループサイズによって幼児の反応も異なることが予想される。

グループサイズが読み聞かせの効果に及ぼす影響

絵本の読み聞かせにおけるグループサイズが、幼児の物語理解とイメージ形成に及ぼす影響については、中澤・杉本・衣笠・入江(2005)が調査している。彼らは、5歳児を1人群、3人群、6人群に分け、読み聞かせ後に理解課題と作話課題を個別に行うことで、グループサイズごとの理解度とイメージ形成度を比較した。その結果、理解度とイメージ形成度ともに3人群が6人群より高い傾向にあることが明らかになった。

年長児を1人群と7人群に分けて読み聞かせを行い、8項目のチェックリストでグループサイズごとの幼児の反応を比較した岩崎(1986)では、1人群では凝視の正反応が多いが、7人群では笑いや驚き、繰り返しといった正反応が多く見られたことから、集団読み聞かせにおける効果として、言語や動作における反応が活発になることが明らかになった。しかし、この調査では同時に負の反応においても7人群の方が活発になっており、必ずしも少数者より集団の方が読み聞かせに良い影響を及ぼすとはいえない。また、1人群では他の幼児が存在しないため、集団と比較してその影響を検討するには適切とはいえないだろう。

大元・青柳(2012)では、年長児を1人群、3人群、24人群に分け、読み聞かせに対する反応を15秒ごとにチェックし

た。その結果、人数が多くなるほど正反応、負反応の種類と量が増えることが見出された。大元・青柳（2012）の研究では、正反応を小林（1997）の10項目、岩崎（1986）の2項目、独自に付け加えた2項目の計14項目、負反応を小林（1997）の5項目、岩崎（1986）の2項目の計7項目で構成したチェックリストを作成している。しかし、「集中しているが、体が動いている」「他の子どもにうるさいなどと注意する」といった一般的には負の反応と考えられる項目が正反応に分類されているなど、正負の基準が曖昧であることや、「興味を示し～している」「集中しているが～している」など客観的には判断しにくい項目も多いなどの問題がみられ、幼児の反応を適切にチェックできていない可能性がある。また、大元ら（2012）の研究では、異なるグループサイズで2度目の読み聞かせを受けている幼児がいるなど、条件が統一されていない。小林（1997）の研究でも明らかにされているように、同じ絵本を繰り返して読むことで幼児の反応が異なる可能性があるため条件を統一する必要があるだろう。

以上のことから、従来の研究の問題点として、幼児の反応を取り出すためのチェックリストや条件が適切とは言えず、グループサイズごとに反応の種類や量が異なるかが明らかにされていないこと、そのために絵本の読み聞かせに適したグループサイズが明らかにされていないことが挙げられる。

本研究の目的

本研究では、読み聞かせの条件を統一したうえで、正負の反応に限定せず、幼児の反応を基に分類したチェックリストを作成し、グループサイズが幼児の絵本に対する反応に及ぼす影響を調査することを目的とする。そして、その影響から絵本の読み聞かせに適したグループサイズを検討していく。

方法

対象者および実施時期 H大学附属M幼稚園の年長児28名（男子16名、女子12名）を対象として、平成28年11月に調査を実施した。

実験場所 H大学附属M幼稚園の一室で、普段読み聞かせなどに使用されている。

読み聞かせの材料 ビリケン出版の東君平（2000）作『びりびり』を、読み聞かせの絵本として用いた。この絵本は、対象児が読んだことのない絵本で、反応が出やすいように「くりかえし」があるという理由で使用した。読み聞かせに要する時間は約2分30秒間であった。

実験手続き 実験は、午前の自由遊びの時間帯を利用し行った。自由遊び中の他の幼児が気にならないように、幼児の後方に外が見える窓や入り口があるような座席配置にした。読み聞かせは、学生1名が椅子に座って行い、学生側から質問や声かけ、受け答えはしないように統一した。読み聞かせをする前に、今から絵本の読み聞かせをすることを伝え、絵本の読み聞かせを聞いたことや絵本の内容は他の幼児には話さないようお願いした。実験の様子は、読み手の横に設置したビデオカメラで記録した。

担任教師に幼児を男女混合で3人群と8人群に分けてもらい、座席をこちらで指定した。3人群は4グループで計12名、8人群は2グループで計16名の男女である。

結果

チェックリスト

録画した動画をもとに、読み聞かせ中の幼児の反応についてチェックリストを作成した。Table 1 に示したように、項目は対他的反応と対自的反応の16項目で構成されている。15秒間を1インターバルとして、全10インターバルでチェックした。同じインターバル内に複数の反応が見られた場合は、いずれの項目にもチェックした。

1. 対他的反応

グループサイズ（3人/8人）及び読み聞かせの時間帯（前半/後半）ごとにおける、対他的反応の平均生起回数と標準偏差を示したものが Table 2 である。続いて、グループサイズや読み聞かせの時間帯によって幼児の対他的反応が異なるのかを明らかにするために、各反応項目の生起回数について 2 要因分散分析を行う。

1.1. 他の幼児と絵本に関する話をする グループサイズ（2）×時間帯（2）の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果及び時間帯の主効果は有意ではなかった。

1.2. 他の幼児と微笑み合う グループサイズ（2）×時間帯（2）の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果及び時間帯の主効果は有意ではなかった。

Table 1 読み聞かせ中の幼児の反応についてのチェックリスト

対他的反応		他の幼児と絵本に関する話をする
		他の幼児と微笑み合う
		静かにするよう注意する
		他の幼児を見る
		喋った幼児を見る
対自的反応	発言	絵本に対する発言をする
		絵本に関係のない発言をする
		絵本の内容を復唱する
	表情	声を出して笑う
		微笑む
		絵本に対して驚く
	動作	絵本を指さす
		手足をもぞもぞさせる
		身を乗り出す
	視線	よそ見をする
絵本をじっと見る		

Table 2 各群における対他的反応の平均生起回数

		前半	後半
他の幼児と絵本に関する話をした回数	3 人群	0.0 (0.00)	0.0 (0.00)
	8 人群	0.3 (0.60)	0.4 (0.62)
他の幼児と微笑み合った回数	3 人群	0.2 (0.39)	0.0 (0.00)
	8 人群	0.9 (0.96)	0.4 (0.63)
他の幼児に静かにするよう注意した回数	3 人群	0.2 (0.58)	0.0 (0.00)
	8 人群	0.0 (0.00)	0.1 (0.25)
他の幼児を見た回数	3 人群	0.7 (1.37)	0.6 (0.67)
	8 人群	1.9 (1.44)	1.4 (1.02)
喋った幼児を見た回数	3 人群	0.2 (0.58)	0.1 (0.29)
	8 人群	0.1 (0.34)	0.6 (0.73)

注) 括弧内は *SD*

1.3. 静かにするよう注意する グループサイズ (2) × 時間帯 (2) の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果及び時間帯の主効果は有意ではなかった。

1.4. 他の幼児を見る グループサイズ (2) × 時間帯 (2) の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果及び時間帯の主効果は有意ではなかった。

1.5. 喋った幼児を見る グループサイズ (2) × 時間帯 (2) の 2 要因分散分析を行った。その結果、グループサイズ×時間帯の交互作用が有意であった ($F(1,26) = 5.46, p < .05, \eta^2 = .06$)。そこで、下位検定を行ったところ、時間帯の後半においてグループサイズの単純主効果が有意であった ($F(1,26) = 4.62, p < .05, \eta^2 = .15$)。また、8 人群において時間帯の単純主効果が有意であった ($F(1,15) = 5.79, p < .05, \eta^2 = .14$)。Figure 1 から分かるように、後半では、8 人群の幼児は 3 人群の幼児より喋った幼児の方を多く見たが、前半にはこのような差は見られなかった。また、8 人群の幼児は、前半より後半で喋った幼児の方を多く見ていたが、3 人群の幼児ではこのような差は見られなかった。

2. 対自的反応

2.1. 発言

グループサイズ (3 人/8 人) 及び読み聞かせの時間帯 (前半/後半) ごとにおける、対自的反応の「発言」について、各反応項目の平均生起回数と標準偏差を示したものが Table 3 である。続いて、グループサイズや読み聞かせの時間帯によって幼児の反応が異なるのかを明らかにするために、各反応項目の生起回数について 2 要因分散分析を行う。

2.1.1. 絵本に対する発言をする グループサイズ (2) × 時間帯 (2) の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果及び時間帯の主効果は有意ではなかった。

2.1.2. 絵本に関係のない発言をする グループサイズ (2) × 時間帯 (2) の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果及び時間帯の主効果は有意ではなかった。

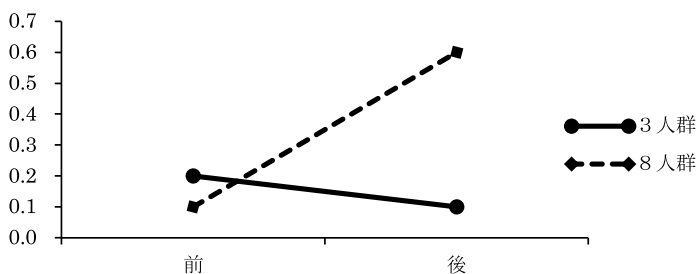


Figure 1 各群における「喋った幼児を見た」回数の平均値

Table 3 各群の対自的反応の発言における平均生起回数

		前半	後半
絵本に対する発言をした回数	3 人群	0.3 (0.87)	0.2 (0.58)
	8 人群	0.8 (0.93)	0.9 (0.85)
絵本に関係のない発言をした回数	3 人群	0.0 (0.00)	0.0 (0.00)
	8 人群	0.1 (0.25)	0.1 (0.25)
絵本の内容を復唱した回数	3 人群	0.1 (0.29)	0.0 (0.00)
	8 人群	0.1 (0.34)	0.0 (0.00)

注) 括弧内は *SD*

2.1.3. 絵本の内容を復唱する グループサイズ (2) × 時間帯 (2) の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果及び時間帯の主効果は有意ではなかった。

2.2. 表情

グループサイズ (3 人/8 人) 及び読み聞かせの時間帯 (前半/後半) ごとにおける、対自的反応の「表情」について、各反応項目の平均生起回数と標準偏差を示したものが Table 4 である。続いて、グループサイズや読み聞かせの時間帯によって幼児の反応が異なるのかを明らかにするために、各反応項目の生起回数について 2 要因分散分析を行う。

2.2.1. 声を出して笑う グループサイズ (2) × 時間帯 (2) の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果 ($F(1,26) = 10.85, p < .01, \eta^2 = .23$) と、時間帯の主効果 ($F(1,26) = 4.42, p < .05, \eta^2 = .03$) が有意であった。さらに、グループサイズ×時間帯の交互作用が有意であった ($F(1,26) = 4.42, p < .05, \eta^2 = .03$)。そこで、下位検定を行ったところ、時間帯の前半 ($F(1,26) = 12.11, p < .01, \eta^2 = .32$) と、後半 ($F(1,26) = 5.06, p < .05, \eta^2 = .16$) の両方において、グループサイズの単純主効果が有意であった。また、8 人群において時間帯の単純主効果が有意であった ($F(1,15) = 5.95, p < .05, \eta^2 = .08$)。Figure 2 から分かるように、時間帯の前半、後半ともに 8 人群の幼児は、3 人群の幼児より声を出して笑っていた。また、8 人群の幼児は、時間帯の後半より前半の方が声を出して笑っていたが、3 人群の幼児にはこのような違いは見られなかった。

2.2.2. 微笑む グループサイズ (2) × 時間帯 (2) の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果 ($F(1,26) = 21.21, p < .001, \eta^2 = .35$) と、時間帯の主効果 ($F(1,26) = 10.89, p < .01, \eta^2 = .06$) が有意であった。時間帯に関わらず 8 人群の幼児は 3 人群の幼児より微笑んでいた。また、グループサイズに関わらず時間帯の前半の方が後半よりも微笑んでいた。

2.2.3. 絵本に対して驚く グループサイズ (2) × 時間帯 (2) の 2 要因分散分析を行った結果、時間帯の主効果のみが有意であった ($F(1,26) = 6.42, p < .05, \eta^2 = .08$)。グループサイズに関わらず時間帯の前半の方が後半よりも絵本に対して驚いていた。

Table 4 各群の対自的反応の表情における平均生起回数

		前半	後半
声を出して笑った回数	3 人群	0.0 (0.00)	0.0 (0.00)
	8 人群	1.3 (1.24)	0.6 (0.96)
微笑んだ回数	3 人群	0.9 (1.38)	0.3 (0.78)
	8 人群	2.9 (1.41)	1.9 (1.00)
絵本に対して驚いた回数	3 人群	0.1 (0.29)	0.0 (0.00)
	8 人群	0.4 (0.50)	0.1 (0.25)

注) 括弧内は *SD*

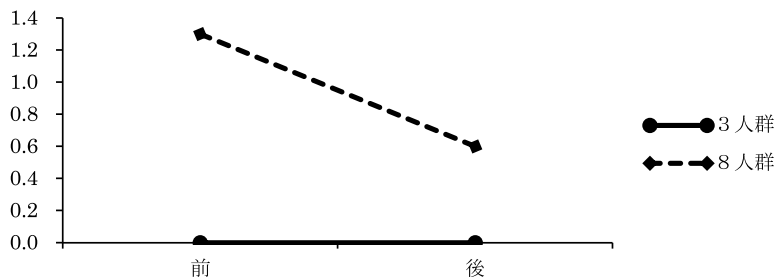


Figure 2 各群における「声を出して笑った」回数の平均値

2.3. 動作

グループサイズ（3人/8人）及び読み聞かせの時間帯（前半/後半）ごとにおける、対自的反応の「動作」について、各反応項目の平均生起回数と標準偏差を示したものが Table 5 である。続いて、グループサイズや読み聞かせの時間帯によって幼児の反応が異なるのかを明らかにするために、各反応項目の生起回数について 2 要因分散分析を行う。

2.3.1. 絵本を指さす グループサイズ（2）×時間帯（2）の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果及び時間帯の主効果は有意ではなかった。

2.3.2. 手足をもぞもぞさせる グループサイズ（2）×時間帯（2）の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果（ $F(1,26) = 10.04, p < .01, \eta^2 = .18$ ）と、時間帯の主効果（ $F(1,26) = 23.36, p < .001, \eta^2 = .17$ ）が有意であった。時間帯に関わらず 8 人群の幼児は 3 人群の幼児より手足をもぞもぞさせていた。また、グループサイズに関わらず時間帯の前半の方が後半よりも手足をもぞもぞさせていた。

2.3.3. 身を乗り出す グループサイズ（2）×時間帯（2）の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果及び時間帯の主効果は有意ではなかった。

2.4. 視線

グループサイズ（3人/8人）及び読み聞かせの時間帯（前半/後半）ごとにおける、対自的反応の「視線」について、各反応項目の平均生起回数と標準偏差を示したものが Table 6 である。続いて、グループサイズや読み聞かせの時間帯によって幼児の反応が異なるのかを明らかにするために、各反応項目の生起回数について 2 要因分散分析を行う。

2.4.1. よそ見をする グループサイズ（2）×時間帯（2）の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果及び時間帯の主効果は有意ではなかった。

2.4.2. 絵本をじっと見る グループサイズ（2）×時間帯（2）の 2 要因分散分析を行った結果、グループサイズの主効果（ $F(1,26) = 4.92, p < .05, \eta^2 = .04$ ）と、時間帯の主効果（ $F(1,26) = 345.43, p < .001, \eta^2 = .72$ ）が有意であった。時間帯に関わらず 3 人群の幼児は 8 人群の幼児より絵本をじっと見ていた。また、グループサイズに関わらず時間帯の前半の方が後半よりも絵本をじっと見ていた。

Table 5 各群の対自的反応の動作における平均生起回数

		前半	後半
絵本を指さした回数	3 人群	0.0 (0.00)	0.0 (0.00)
	8 人群	0.0 (0.00)	0.2 (0.54)
手足をもぞもぞさせる回数	3 人群	2.2 (2.03)	0.8 (1.11)
	8 人群	3.6 (1.40)	2.2 (0.83)
身を乗り出した回数	3 人群	0.0 (0.00)	0.0 (0.00)
	8 人群	0.2 (0.58)	0.3 (0.48)

注) 括弧内は *SD*

Table 6 各群の対自的反応の視線における平均生起回数

		前半	後半
よそ見した回数	3 人群	0.9 (1.31)	0.7 (0.89)
	8 人群	1.2 (1.39)	0.8 (1.10)
絵本をじっと見た回数	3 人群	5.0 (0.00)	3.0 (0.00)
	8 人群	4.5 (0.89)	2.6 (0.62)

注) 括弧内は *SD*

考察

本研究は、グループサイズが幼児の絵本に対する反応に及ぼす影響を調査し、その影響から絵本の読み聞かせに適したグループサイズを検討することが目的であった。

グループサイズや時間帯が幼児の視線や動作に及ぼす影響 まず、グループサイズや時間帯が幼児の視線や動作に及ぼす影響を考察することで、絵本の読み聞かせに対する幼児の集中について検討したい。交互作用がみられた反応としては、「喋った幼児の方を見る」が挙げられる。「喋った幼児の方を見る」という反応は対他的なものであり、絵本から目を離しているという点で絵本への集中が途切れた状態にあったことが考えられる。前半では3人群と8人群の反応の量に差は見られないが、後半では3人群の反応が減るのに対して8人群では反応が増えている。ここで、「喋った幼児」を表す対自的な「絵本に対する発言をする」と「絵本に関係のない発言をする」という反応を確認すると、有意差はみられていない。このことから、両群とも読み聞かせ全体を通して幼児の発言の量に変化はないにも関わらず、時間が経つにつれて8人群では喋った幼児の方を見てしまう反応が増え、3人群では喋った幼児の方を見なくなったといえる。この結果は、8人群では時間の経過によって集中力が低下しやすいのに対して、3人群では集中力が持続しやすいことを示唆している。

主効果がみられた反応についてみると、「絵本をじっと見る」反応では、3人群の方が8人群より多く、グループサイズに関わらず前半の方が後半より反応が多くなっていった。「絵本をじっと見る」という反応が多いということは、幼児が絵本に集中しているということだと考えられる。このことから、グループサイズに関わらず時間の経過により絵本への集中力は低下していくが、3人群の方がより絵本に集中することができ、その集中力も持続すると考えられる。これを支持するように、絵本に集中できていない状態を示していると考えられる「手足をもぞもぞさせる」反応では、8人群の方が3人群よりも反応が多くみられた。一方で、「手足をもぞもぞさせる」反応においても、グループサイズに関わらず前半の方が後半より反応が多くなっており、「喋った幼児の方を見る」や「絵本をじっと見る」反応にもとづいて考察された、時間の経過により絵本への集中力が低下していくという示唆と一致しない。ここで録画した映像を見ると、読み聞かせ序盤で「手足をもぞもぞさせる」反応が多いことから、読み手が学生であることや座席が指定されていることなど、普段の読み聞かせと異なる環境への幼児の緊張もこの反応に表れていたと考えられる。このことを考慮すれば、時間の経過により絵本への集中力が低下していくという「絵本をじっと見る」や「喋った幼児の方を見る」で得られた示唆と矛盾するわけではないといえるだろう。

グループサイズや時間帯が幼児の表情に及ぼす影響 続いて、グループサイズや時間帯が幼児の表情に及ぼす影響を考察することで、絵本の読み聞かせにおける幼児の感情表出や興味の持続について検討したい。交互作用がみられた反応としては、「声を出して笑う」が挙げられる。8人群は3人群より前半でも後半でも声を出して笑っていた。それに対して、3人群では、読み聞かせ全体を通して一度も「声を出して笑う」反応が見られなかった。このことから、8人群での読み聞かせは、3人群での読み聞かせより幼児がリラックスして聞くことができたと考えられる。幼児を1人群と7人群に分けて読み聞かせを行った岩崎（1986）も、7人群で声を上げて笑う反応が多かったことに対して、幼児が普段集団で読み聞かせてもらうことに慣れているためだと考察している。録画した映像でも、絵本に対して微笑んでいた幼児が、隣の幼児の笑い声を聞いて声を出して笑うという場面が見られた。集団という慣れた形式でリラックスして読み聞かせを聞くことで、感情が表に出やすくなり、他の幼児の反応に影響されて連鎖的に全体での反応も増えるという相互作用が生じたと考えられる。主効果がみられた「微笑む」反応においても、3人群より8人群で反応が多くなっていったことから、グループサイズの大きい集団での読み聞かせのほうが、幼児は感情を表出しやすく、楽しんで聞くことができると示唆された。一方で、8人群では、笑い声や発言が他の幼児の絵本への集中を遮ってしまう場合もあった。また、8人群における「声を出して笑う」や「微笑む」反応の中には、絵本に対するものだけでなく、他の幼児の反応に対する笑いも多く含まれていた。「絵本をじっと見る」、「喋った幼児の方を見る」、「手足をもぞもぞさせる」反応と合わせて考えた場合、絵本への集中という点では、3人群の方が適しているといえるだろう。

「声を出して笑う」反応では、8人群において前半のほうが後半より多いという結果もみられた。「声を出して笑う」反応が後半に少なくなっていたのは、今回使用した絵本が、「びりびり」という音を繰り返し、内容も「びりびり」という生き物

が徐々に増えていくというものであったため、絵本が進むにつれて繰り返しに飽きてしまったことが原因だと考えられる。このことは、「驚き」反応において前半の方が後半よりも多かったことから示唆される。しかし、8 人群ではこれらの反応が時間とともに減ってはいたが、後半にも反応が表れていた。先に述べたように、8 人群では感情が表出しやすく、絵本への反応を周囲の幼児と共有することができたため、絵本への興味が持続したと考えられる。本研究では条件を統一するために、読み手による質問や声かけ、受け答えをしなかったが、これらを取り入れることで、幼児の絵本への集中や興味を持続させることができる可能性があるだろう。

まとめと今後の課題

本研究では、複数の幼児が同時に読み聞かせを受ける場合、そのグループサイズが小さければ読み聞かせに対する集中力が高く、持続させることができるのに対して、グループサイズが大きければ読み聞かせを楽しむことやリラックスして聞くことができ、興味を持続させやすいことが明らかになった。したがって、幼児への読み聞かせを行う際には、絵本の特性や読み聞かせの目的に応じてグループサイズを変更していく必要があるといえる。

本研究では、読み手が学生であることや座席を指定したこと、声かけや受け答えをしなかったことなど、幼児にとって普段の読み聞かせの条件と異なるものも多くあった。これらの条件を変えることで、幼児の絵本の読み聞かせに対する集中や興味を持続させることができる可能性が考えられる。幼児の反応に影響すると考えられる他の条件でも調査していくことが今後の課題といえるだろう。

謝辞

本論文作成にあたり、快く実験にご協力いただきました幼稚園の先生方と幼児の皆さんに厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 岩崎真理子 (1986). 絵本の読み聞かせにおける効果 (その 1) 日本保育学会大会研究論文集 39, 280-281.
- 小林真 (1997). 集団場面における絵本の読み聞かせと幼児の反応—年齢・性差と座席の位置による影響について— 児童文化研究所所報 19, 1-13.
- 公益社団法人全国学校図書館協議会. 全国学校図書館協議会 | 調査・研究 | 「第 64 回学校読書調査」の結果 www.j-sla.or.jp/material/research/64dokusyotyousa.html (2019/01/07 参照).
- 松村敦・根岸舞・宇陀則彦 (2014). 絵本の読み聞かせ後の問いかけが子どもの物語理解とイメージ形成に与える影響 日本教育工学会論文誌 38, 157-160.
- 松村敦・杉七瀬・宇陀則彦 (2008). 読み聞かせ時の反応に着目した絵本に対する子どもの好みの取得方法に関する検討 日本教育工学会論文誌 32, 125-128.
- 文部科学省 (2001). 子どもの読書活動の推進に関する法律 文部科学省.
- 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領解説 文部科学省.
- 中澤潤・杉本直子・衣笠恵子・入江綾子 (2005). 絵本の読み聞かせのグループサイズが幼児の物語理解・イメージ形成に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要 53, 203-210.
- 大元千種・青柳恵里香 (2012). 絵本に対する幼児の関心に及ぼす読み聞かせのグループサイズの影響 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要 7, 167-178.